

同和問題〈特活〉学習指導案

平成2年11月7日（水）第5校時

板野中学校2年A組

男子18名、女子19名 計37名

指導者 佐野富子

1. 主 題 支え合う集団

2. 主題設定の理由

人間が生活していく上で、それぞれの目標をもち、物事にうちこみ努力する姿は、大変すばらしいものがある。本学級は、「挑戦－CHALLENGE」を学級目標とし、学校生活の中で、失敗をおそれず自己の可能性を信じ、未知のものに、ひるむことなく前向きにとり組んでいこうと誓い、スタートした。そして、校内陸上大会・板中祭、中学校最大の行事である修学旅行を通して、集団生活のルールを守り、戦争へのいかり、平和の尊さを自分の肌で体験した。これから、勉強に部活動にと充実し、落ち着いた学校生活を送ることのできる毎日となってきた。

しかし、一見明るく和やかなクラスの雰囲気の中に、何ら問題はないようにみえるが、そこに隠すことのできぬ事実がある。10月の日々欠席率3.02、男子18名、女子19名、計37名のクラスの中に、いつも空席が3席あるという勘定になる。4月にスタートして以来、クラス全員がそろったのがたった一日、それも4月9日の始業式だけという、何ともいえぬきびしい現実である。そして、病気以外で休むものに対して、偏見をよそおい「顔も忘れてしまった」と平気で口にする風土が、クラスの中に潜んでいる。

その空席の一人Aさん。彼女は小学校3年より登校拒否がはじまり、5年生の時の出席日数はわずか5日間である。修学旅行も唯一彼女が心を開ける友が盲腸炎で参加辞退したため、何日も悩みぬいた末、不参加となった。あゆみに「友だちには干渉されたくない。人は人、自分は自分。自分の世界にたちいてもらいたくない・・・」と書いている。

そして、もう一つの空席のBさん、始業席に姿をみせ、それ以来学校へいくのをしぶるようになり、外部機関にも相談しているが、状況は日増しに悪くなっている。また、複雑な家庭環境の中でもいじけることなく、明るく、笑顔でがんばっているCさん。

いろいろな悩み、苦しみをもちた仲間がいるのに具体的な事象がみえないことから、直接自分たちに関係のないこととして、傍観者でおわっている。また、それは同和問題学習においても、「差別はいけな」「差別なんかなくなればいい」レベルのとどまり、そう考えることに満足し、その次への段階への道を見失っているように思う。クラスの一員として、「自分は何をすればいいのか」「何ができるのか」全員の生徒が差別をもっと自分のものとして考え、とり組む必要がある。そうしなければ、いつ差別者になるかも知れない。そこで、本教材「ミナコ逃げるな」では、ミナコが自分を疎外している学級に対して、訴えることをきっかけにし、仲間とは何かを問いかけている。そして、ミナコをとりまく一人一人も、さまざまな思いをか

かえて生活している。その苦しみや怒りを語ることににより、友を理解することにつながっていく。このことをみんなで考えながら支え合う集団。そして、真に連帯することによって幸福が得られることを理解させたいと思い、本主題を設定した。

3. ね ら い

一人一人の問題を学級全体の問題としてとらえ、仲間として共に支えあう集団を養いたい。そして、常に真実を見つめ、同和問題解決に立ち向かおうとする意欲と実践力を身につけさせる。

4. 視 点 集団と連帯

5. 指導計画

(1) 常時指導 あゆみを通して自分の生活を見つめなおし、正しいことが正しいと言え、行動できる仲間づくりに努めさせる。

(2) 関連的指導 道徳「てのひらのぬくもり」わたしの願い

障害者差別を通して、身のまわりの差別に気づかせ、人としての生き方を学ばせる。

(3) 核心的指導 支えあう集団「ミナコ逃げるな」にんげん……………5時間（本時3／5）

(4) 発展としての関連指導

道徳「田中君の病気見舞」

男女の特性について理解を深め、お互いの立場や考え方を尊重する態度を養う。

(5) 常時指導（発展）

現実の差別や不合理について気づかせ、人権意識を高め合う仲間づくりに努める。

6. 本時の指導

(1) 目 標

一人一人が互いに支え合うことのすばらしさを知り、自分の本当の気持ちを語り、お互いの心をかよわせることが人権を大切に、差別解消につながるということを理解させ、積極的に取り組む態度を育てる。

(2) 展 開

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
「ミナコ逃げるな」を読んで感想を発表	○この文を読んでどんなことを感じたか。 ・ミナコに腹が立つ。でもミナコのおかれて いる立場を知ってまるっきりちがった気持	○一人一人の感想をうけ とめ大切にしたい。

する。	ちになった。 ・ヤスイチはほんとうに人間は一人だと思っているのか。	
「ミナコ」と「ミナコをとりまく状況」について考える。	○「ミナコ」は学校でどんな行動をとっていたのだろうか。 ・教科書を持ってこない。 ・授業のエスケープ e t c. ○ミナコをこういった行動にはしらせた原因は何だったのか。 ・本人自身の問題 ・家庭環境 ・クラスの人の「ミナコ」へのかかわり方 ○ミナコに対してクラスみんなはどのように接してきただろうか。 ・ミナコはこわいから注意できない。 ・部落なので何を言ってもダメ。 ○ミナコのような状況におかれクラスの中で疎外され差別をうけ、果してミナコは甘えているといえるだろうか。自分がミナコならどうするか。 ・まわりのものが仲間はずれにするからひねくれた。まわりにも責任がある。 ・大なり小なり誰でも悩み苦しみがある。しんどいのはミナコだけではない。 ○ミナコと共にクラスの一員として何ができるか。 ・本音でものがいえる仲間づくり ○「ススム」はどんな子だろうか。 ・おもしろくひょうきん ・バカにされながらもしんぼうしている。 ○いつもバカにされながらもふざけていたスス	○落ちこぼれつつあるミナコの弱さ、甘えの構造を批判、指摘しながらミナコのかかえている「本当のしんどさ」他人に知れぬ部分の重みを理解させていく。 ○表面上は迎合やたてまえて支え合うといっているが、本当はうわべだけの仲間づくりだということを明らかにしていく。 ○ミナコの告発していることに対して、受けとめなければならないが同時にミナコの逃げを許さずたいていく。 ○支え合うことの本当の意味を理解させる。 ○ススムのつらさ悲しみ
「ススム」について考える		

	ムの訴えをどう思うか。 ・今までがまんしていてつらかっただろう。 ・勇気をだして訴えたのに感動した。	を自分のものとしてう けとめ共感させていく
学級の問題に ついて話し合 い、自分の取 り組み方に ついて考える。	○クラスの中でススムのようなこと がないか話し合う。 ・人の気になるあだ名を平気でいう。 ・強い子が弱い子をいじめ、弱い子がもっと 弱い子をいじめている。	○真実を見る目を養い、 仲間と連帯して歩まね ばならないことを考え させる。

「ミナコ逃げるな」 学習プリント

(1) 「ミナコ逃げるな」を読んだときの感想をかきなさい。

(2) ミナコについて考えてみよう。

①ミナコは学校でどういった行動をとっていただろうか。

②ミナコをそういった行動にはしらせた原因は何だったのか。

③ミナコのような状況におかれた時、自分だったらどうするか。

④ミナコに対して、クラスの一員として何をしなければならないのだろうか。

(3) ススムについて考えてみよう。

①ススムはふだんはどんな男の子だろう。

②ふだんみんなからバカにされていながらもふざけていたススムがみんなに心の中をうちあける。この訴えをみんなはどう思うか。

③A組の中で、これと同じようなことがないだろうか。考えてみよう。

④この問題を解決するために、どうすればよいのだろうか。

授業記録

T：今までみんなで、渋染一揆、夕焼けが美しい、修学旅行前にはヒロシマの歌と学習を積み重ねてきました。そんな中でいろんな思いがみんなの心の中にあつたと思います。それで今日の「ミナコ逃げるな」はいままで勉強してきたことと大きく違います。板野中で、自分のクラスでミナコ、コウジ、ススムがいるんです。みんなの周りで苦しんでいるミナコが隣に座っているんです。だからかえって本音がいえんとかある子を批判することになるかもしれないか、気がひけて自分の思いをぶつけられん子もいると思います。でも勇気をだして自分の今の素直な気持ちを語って下さい。今日ひょっとして時間が足りなくてミナコだけで授業が終わるかもしれません。時間があればススムについても考えてみたいと思います。最初先生もA組の子もごっつい緊張しているので、この「ミナコ逃げるな」をよんだときの感想を言ってもらいます。

根ヶ山：クラスのみんなは表面は明るそうに見えるけど、みんな誰もがいろんな事で悩みを抱えているんだな—とここまではせんのにと思いました。

土内：クラスのみんなはつらい思いをしても頑張っているのにミナコは自分のわがままを聞いてもらえんからといって学校の人々にぶつけたのは、はっきり言って悪いと思います。

近藤：僕はこれを読んだときミナコはとてもわがままなやつと思いました。

でも読んでいくうちにクラスのみんながミナコを仲間にいれようとしないのでわがままが一層ひどくなったと思います。クラスのみんなの態度がそうさせたとも言えると思います。

藤田：僕も最初ミナコは本当にわがまままで自分勝手な女だなあ、僕のクラスにいたら多分いやな存在になるだろうなと思いました。でもその内にミナコの思いがはっきりしてきてクラスのみんなの心を一つに助けあっていかなくてはいけないなあと思いました。

楠本：私は一体このミナコは何を考えているのかわかりませんでした。けど、段々読んでいくとミナコという子がどんな子わかりました。そして他の友達ももっと真剣にミナコの事を話合いその上に自分の事もみんなにしてもらえるようなクラス—そんなクラスが現実に私達にも作れるのかなあと思いました。

三木：この美奈子逃げる名を読む前に僕は差別を受けている人がどのように苦しんでいるのかあまりしりませんでした。でも読んでいくうちに部落差別の本当の恐ろしさがわかりました。

自分が言われていやなことはあいての人もいやなんだから友達に対する気配りも差別をなくすために必要だと思います。

T：今までみんなに感想をいってもらったけどミナコに対する思いが強くてミナコ中心の感想が多かったように思います。そしてこれからミナコについてもう少し深く掘り下げてい

こうと思います。最初 みんなにミナコがどんな子かをしってもらうために「学校でのミナコ像」というのを作り上げてみたいと思います。学校ではどんな人ですか。

吉川：教科書を忘れてきたと言っては机をひっつけて話しかけたり実習机にとび乗ってあるいたりしている子です。

久次米：ススムの背中をつついたり教室を飛び出したりしている。

T：ミナコについてはプリントに書いてあるね。友達のじゃまをするし自分に気に入らん事があったら飛び出す。先生ともどなりあいをする。でも、こんなミナコ急にある日突然こんな態度を取るようになったんでないね。何日かひょっとしたら何年かかかってこんなミナコになってしまったという部分があると思うね。さてここまでミナコを追いつめてそしてこんなミナコにさせてしまった原因は一体なんだろう。何がここまでミナコをこんな行動にはしらせてしまったんだろうか。

井上：家でミナコへのしつけが問題と思う。それと学校でも嫌われものになっているからだと思う。

T：もう少し詳しく、家でしつけとものを具体的に言うとうんのかな。

岡本：家にかえっても誰も居ないし父と母が別れる前の事があり混乱したりしていた。だからさみしさとうらめしさがまざりあってとても苦しかったと思います。

T：お父さんとお母さんがけんかして

離婚する、こんな子供にとってつらいことはないよね。ミナコが自分の家族についていえない部分だね。お父さん、お母さんが離婚してミナコはお母さんにつくんよね。でもそのお母さんある日突然いなくなる。ミナコはお母さんに捨てられたんよ。ほうられたんよ。そしてお父さんに引き取られる。そのお父さんもミナコが家に帰ったらいない。ミナコは学校でも家でも一人ぼっちなんよね。じゃ、ミナコがこんなになってしまった原因これだけだろうか。ほかはないだろうか。家庭的な問題だけでミナコがこうなったんだろうか。

佐藤：学校での友達の問題があるとします。仲間にはいれんし仲間はずれにされていたから、さみしくて、みんなにかまってほしいから、あんな事をしたんだと思います。

T：二つ目の原因がでてきたね。友達の問題、そしてミナコを取り巻く学校 みんなに問題があるとね。これだけです？ みんな家と友達関係だけでこんな行動に全ての子が走りますか。

中平：ミナコにとってつらいことばかりでやり切れない思いが学校という場でも自分の気持ちが自制できず悪い行動へと走らせたと思います。

松田：自分の弱さ、そして「むら」に生まれたということもあると思います。

T：もう少しつけ足すことありませんか。家庭、友達とでてきましたが、100人いても100人みな同じ行動とらんね、一番大切な何かを忘れていな

いだろうか。

近藤：ミナコ地震の心の問題だと思います。ミナコが意志を強く持ってこんなんではあかと立ち直りの気持ちがあると思います。本人さえしっかりしていたらここまではいかないと思います。

T：今3つめの原因ができました。一つは家庭環境、二つは友達との問題、三つ目は本人の強い意志。それじゃ、こんな状況に置かれたらみんなはどんなふうな行動をとりますか。ミナコみたいになりますか、どうですか。強く意志を持って前向きに生活できていきますか。

美馬：私は教室で待って座っています。

広瀬：今の私なら家で歌を聞いたりTVみたりコンサートへ行きます。

近藤：ミナコの立場に立ったら学校を休んだり早退したりすると思います。学校に来てまでみんなにいやがらせをされたりしてすごむかつくからです。

三木：名にも言い返すこともできずだまっていると思います。そして一日中溜った不安をだれにもいえずそのまま過ごすと思います。

藤田：もし自分だったらこんな学校、家でも何も面白くないのでこんな生活耐えられないと思います。それで自分でこんな生活変えていこうとする努力をしたいと思います。

阿部：もし自分ならおばあちゃんの家に行くか多分学校にも行きづらいので登校拒否する。

斎藤：やっぱりミナコのような態度を

とるかも知れない。でもクラスのみんなが温かいめで見守ってくれたらミナコのようにわがままをいったりしないですむと思う。そして友達がいなくてさびしいので仲間に入ろうとする。でも、わがままをいったりするやり方じゃなくてもっと違う方法で友達を作っていきます。

T：今何人かに自分がこのような状況に置かれたらどうするかということを開きました。今日、先生一番みんなに考えてもらいたいのは斎藤さんがいった、クラスのみんなの温かい目があつたら私は変わっていたということよね。確かに低環境もあると思う。でもこれはみんなの今の力では変えられんでしょう。離婚した夫婦を一つにできないよね。だから、ここでクラスメイトの一人としてみんながどのようにミナコにかかわっていかんだらあかんか、そこをを考えてほしいんよ。ここでもう一回いうとくよ。ミナコの意志の弱さ、これがやっぱり一番よね。追いつめられ、追いつめられしても雑草のように立ち上がる子が多いと思います。みんながみんなミナコにならない。本人次第よね。でも、みんながどうかかわったらミナコをここまですむかを考えてもらいたいです。じゃ子のクラスの子はミナコにたいしてどんな態度をとっていたのだろうか、どうですか。

岡本：ミナコなんてどうでもいい。

斎藤：ミナコは怖い。怖いから注意したら後の仕返しがある。

小川：クラスの一員として認めていな

い。子のクラスから出て行ってほしい。

土内：ミナコは自分勝手。

坂田：部落の子だからという気持ち。

偏見があると思う。

T：今、坂田君が言った部落の子だかこうだという気持ち。これは問題にしないといけないね。あの子は〇〇だとレッテルをはって差別していく心、これがミナコを追いつめたし、部落差別の持つ、おもたいところ。人にはなかなかいえないしんだいところが更にミナコの心を荒れさせていくんよね。さて、さっきの話に戻るけどもしクラスにミナコのような子がいたら自分は何ができますか、何をしようと思いますか。ミナコのクラスの子のようにうわべだけで人を見てきめつけていくやり方で人の心が変わえられるだろうか。どうだろうか。

近藤：ミナコをミナコだけの問題としてでなく、自分のこととして考えていく、そしてミナコを仲間の一人としていれてあげます。

岡本：みんなが声をかけてもっと接してあげたらいいと思う。ミナコの問題はなかなか解決できないかも知れないけど相談相手になってあげてもいいし励ましあってあげてたり一緒にいろんな事をするとミナコも少しは落ち着いて本当の笑顔というものを取り戻すと思う。ミナコのつらい、さみしい心に気付いてあげて欲しい。

土内：ミナコを仲間にいれるよう努力もするしやさしくしてあげればよい。

坂田：悪いミナコだけどみんなが気持ちを分かってあげミナコを受け入れ

るようにしてみんなが同じ立場にたって励ましあっていけばいいと思います。

中平：話合いするのが一番いい解決だと思うけど逆にミナコを傷つけることがなければいいと思います。

奥尾：ミナコの本当の心の中を分かってあげクラスのみんながミナコのことをよく理解してあげなければならないと思います。学級会で話し合うなどクラスのみんながミナコにたいしてもっと積極的にならなければいけないと思います。

T：今みんなにミナコにたいして何ができるかを聞きました。でも、先生少し気なったことがあります。みんなの意見の中に「…してあげます。」という言い方が多かったように思うのです。「してあげる」というのは自分は一步高いところにたって下を見下ろしている関係、上と下の関係でないでしょうか。みんなはミナコとは横の関係であって欲しいです。同じ立場でものごとを考えて欲しいなと思います。そしてクラスでも悩み苦しんでいる子に対して今言ったことが言葉でおわらず行動に移してください。無関心を装ったり自分には関係無いと思わんようにね。さて、時間が後少しになりました。ススムについて考えてみたいと思います。今、板野中学校で問題にしなくてはいけなのはススムだと思うのです。ススムというのは辛抱しながらみんなからバカにされても明るくふるまう。がから他の人は本間のススムの思いが見えとらんのよ。そんなスス

ムが、自分のつらいことをみんなに訴えるんよね。でも、板野中にいるススムはよう訴えとらんよね。訴えれんけん、それを、タイヤをカッターで切る。それも何回も切るということでみんなに何か訴えたいんよね。方法は違うけど。さて、みんなこのススムの思い、必死の訴え、どう感じますか。

小川：みんなからバカにされていながらもふざけていたススムがみんなの前で自分の心を打ち明けたというのはとても勇気のあることだと思います。

大森：いつも楽しい事しているけどつらかったことをみんなに訴えるのはすごいと思います。家でも「いい高校にいけ」といわれてかわいそうです。

佐藤：人は外見だけで判断したらいけない。みんな心の奥に悲しいものを持っていると思った。

土内：こんな考えを持っているなんて思ってもみなかった。本当は心のさみしいやつだと思った。

T：いろいろ意見を言ってもらったけど先生の質問の仕方が悪いのかなあ。子の訴えをみんなはどう受け止めるかを考えてもらいたいのです。これを聞いてみんなは一体自分の今置かれている中でどう感じるか、考えてもらいたいのです。今の質問、もう一回します。今日の宿題ですよ。ススムの訴えをどのように受け止めるかです。時間中途半端になって途中で終る形で残念ですけど宿題を残して終りにしたいと思います。

【資料】ミナコ逃げるな

1

春の遠足がすんだ。ミナコは、あいかわらず教科書を忘れてきたといっは、同じ「むら」のサチコに机をくっつけて話しかけたり、前に座っているススムの背中をついたりする。ススムは部落の子ではないが、ミナコとはけんか友だちだ。休み時間になると、ふたりは遊び半分に口げんかして、ばたばたと机の間で追っかけあい始める。いつのまにか、それに数人の女子が加わり、ススムをやっつけてしまう。

家庭科の時間のことだった。先生が出欠をとり終わったとき、ミナコがひとりおくれで教室にはいつてきた。自分の席の所まで来ると、突然大きな実習机の上にとびのって歩きだした。みんなが「ミナちゃん、やめえよ。何してんの。」と制止するが、きかない。先生が力づくで引っばりおろすと、先生につっかかっていく。

しばらく先生と大声でどなりあっていたミナコは、「もうこんなクラスいらんわ。」と言うなり、教室からとびだした。先生がむりやり連れもどして、いすに座らせたが、ミナコは窓の外をみつめ、口をとじたままでその時間を終わってしまった。

2

学級会で、この家庭科の時間のことがとりあげられた。なぜ、そのようなことをしたのか、議長がミナコに問いかける。

「むしゃくしゃしてたからや。」

ミナコの答えは、それだけだ。彼女はそのままだまっていたが、議長にもう一度求められて口を開いた。

「わたしが教室からとびだしたとき、だれもむかえに来てくれへんかったやないの。ほんとうは、わたしなんかおらんほうがええと思ってるんやろ。仲間づくりとか、注意しあうとか言ってるけど、いつも口先だけやないの。みんなは、わたしがじゃまなんやろ、どうやの。」

教室は静まりかえった。議長に何回も促されて、やっと意見が出てきた。

「ミナちゃんが出て行ったことに、気づきませんでした」「先生がむかえに行ってくれたから、別に行く必要はないと思いました。」

「突然のことやったから、どうしていいかわからなかった。」

「そんなの、みんな言いわけやないの。ええかつこせんといて。ほんとの気持ちはどうやの。」

ミナコが再び問いかけた。

サトシがのっそり立ちあがった。彼は、ミナコと同じ「むら」の子だ。

「ミナコ、おまえ、なに言うてるんや。それより前に、おまえがなぜ教室からとびだしたんか、なぜむしゃくしゃしてたんか、それをはっきりせなあかんやないか。とびだしといて、むかえに来てくれへん言うのは、わがままや。あまつたれたこと言うな。」

「なんで言わな、あかんの。そんなこと関係あれへんわ」

ミナコは座ったままはねかえすが、声は小さい。サトシが求める「ほんとうのこと」を、ミナコは言うことができない。

「ミナコもほかのものも、みんな、これまでほんとうのこと、ほんとうの気持ちを出しあっていないと思う。そのことをベールに包んでおいて、仲間づくりができるだろうか。」

先生からの提案をうけて、みんなはまず、ミナコに対してもっている気持ちを出すことになった。

ミナコがこわい。ミナコには注意できない。ミナコは自分勝手だ。ミナコのほうが仲間にはいつてこないのだ。……いろんな意見が出た。

ミナコのことを真剣に考えてこなかった。うわべだけの注意しかしてこなかった。ミナコをさけて、仲よしグループだけでつきあってきた。……そんな反省も出た。

次の日、班ノートの一つに、こんな意見が書かれていた。

「ぼくは、ミナコなんかどうなってもええ、この組から出て行った方がええと、何度も思った。いっそ死んでくれたらええなと、思ったこともあった。ぼくらは、同じ

班のとき、必死になってミナコをなおそうとした。長い時間かけて、班会議したこともあった。泣きながら班会議をつづけたときもあった。

ぼくは、心の底からきらいになり、きたない、きたない、と言いつづけてきた。今までミナコが悪い悪いと書いてきたが、ぼくも悪い。こっちを向いたら、えずくまねをしたり、ミナコが通ったところをよけたりしてきた。ミナコは、やっぱり部落のやつやなと思ったときもあった。

今まで、ミナコの悪いところを話しあってきたが、ひとつもおったものはないと思う。努力はしたと思うが、その努力をもっともっとつづけないと、絶対になおるもんか。少しやっただけでやめるんだったら、はじめからやめろ。苦しいも悲しいも、関係あるかあ。でけへんとか、しんどいとか言っとったら、でけへのじゃあ。そんな簡単になおせたら、今ごろ部落差別もなくなってるはずじゃあ。」

3

二学期にはいつてももなく、運動会の練習にいそがしいころだった。みんなで作った学級の応援旗が窓ぎわにつり下げられ、風にゆれていた。六時間目が終わって、教室がいっせいにざわめいていたとき、だれかが、いたずら半分に、ススムのかばんを廊下へ投げだした。

ススムは、ものも言わずにそのまま教室からとびだし、家へ帰ってしまった。いつもふざけているススムにしては、めずらしいことだった。サチコが電話で説得して、ススムはやっと学校へもどってきた。

どうして、彼がそんなに腹をたてたのか。終わりの学級活動で、ススムが涙をこらえて話したが、それは、みんなにとって思いがけないことだった。

「みんなは、おれをおもしろいやつやと思ってるやろ。おれがようふざけてみんなを笑わせたりしてるの、なんでわかるか。みんなは、おもしろいやつやと思って、ばかにして、おちよくったりしてるけどなあ。それはなあ、みんなの中にはいろいろしてるんや。家に帰ってもなあ、

おもしろくない。学校にも、なんか壁がある。ヤスイチ、おまえはいつも、われ聞せずみたいな顔して、おれをばかにしているようやけどな、おまえの気持ち聞かせてくれ。」

「ススムの気持ち、いま聞いて、これまでのことがよくわかったよ。そやけど、おれはおまえをばかにしたりしてないつもりや。しよせん、人間はひとりやと思ってるんや。おれは仲間には期待してへん。おれはおれや。お前はお前や。おれとこ、おかあさんとふたりだけやろ。おかあさん、あのせまいアパートの中で毎日せつせと内職して、だれの世話にもならんとひとりやでやってるで。人間はみな、ひとりで生きていくしかないんや。コウジを見てみ。コウジは、はつきりものを言いよらん。おとなしいし、頼りない。あいつがこの前、テニスの対外試合で入賞して、その表彰があったとき、みんなは笑うたな。あいつが毎日朝早く、どんだけ苦労してひとりで練習しとったか、知ってるか。コウジは、ばかにされているようやけど、ひとりで黙ってがんばってるんや。」

議論になった。それぞれ意見をのべあった。そうするうちに、みんながクラスの仲間と接する気持ちや、クラスの中での生活が明らかになってきた。みんな、いろいろな思いをいदैて生きているのだ。

数は減ったが、クラスの中のゴタゴタはつづいた。ミナコの班の子らが、エスケープしているミナコをさがしに、保健室に現われることも何回もあった。

クラスみんなが弱い子を支える具体的なとりくみを始めたのも、このころだ。いちばん勉強のおくれているひとりの級友に、放課後ふたりずつクラスの仲間がついて教える。放課後のガランとした教室に、一つの机をばさんで、三つの頭がいつも並んでいた。

4

文化祭の展示に、クラスでは労働のテーマでとりくむことにした。長い議論のすえ、お互いの家の仕事と生活を出しあうことになった。これは、一学期から出すことができずに胸の中にかかえてきた、いちばんつらいこと

だった。

だがやはり、いざとなると言えない。「なんで言わな
あかんのや。」「言われへん。」となってしまう。

文化祭がせまってきた。あと十日というころ、しめ切っ
た部屋の、沈みこむような長い長い沈黙をへて、みんな
は自分のいちばんつらいことを語ることにふみ切った。

「わたし、夕べおかあちゃんと夜運うまで話したんや。
すると、『なんで、みんなによう言わんのや。おとう
ちゃんが聞いたら、どう思う。おとうちゃんは、自分の
仕事、はずかしがってないで。』言うて、おかあちゃん
におこられたんや。わたしは、それで言おうと思った。
いま、こうやって言えるのがうれしいねん。」

屠場で、冬の日も朝早くからジャブジャブと冷たい水
を使い、体をこわしても働いている父親のこと、自分が
小さかったとき、自分をおんぶして住宅闘争に参加した
という母親のことなど、身動きもしないでサチコが語っ
た。

大きな体のサトシも話した。

「おれのおやじは肉屋で働いとった。おれが小学校のと
き、おやじは、いつも酒をのんで帰ってきてはあばれよっ
た。おかあちゃんにあたりよるし、ようなぐりよった。
おかあちゃんは、そのたびに家から逃げだしてた。小学
校のとき、おれは天井からぶらさげられたり、柱にくく
りつけられたりしたこともあった。おれは、おやじをも
うれつに憎んだ。おかあちゃんがかawaiiそうで、しゃあ
なかった。中学一年のとき、おかあちゃんはおやじと別
れた。おかあちゃんは、金属くずを集める仕事をしてい
る。体をこわして、診療所の薬のんで仕事に行くんや。
一週間に三回ぐらい仕事に行くけど、あとは寝てるんや。
おれは一年のころ、ようあばれたわ。暴力もふるったわ。
今おれは、おやじを憎んだらあかんと思うてる。おやじ
があんなふうになったのは、おやじ自身のせいではない
とわかってきたからや。あのとき、おやじと同じように、
おれも負けてたんや。」

ススムも語った。

「おれとこの家族は、九州の山奥の村におったんや。今

でも、おじいちゃんがいる。おとうちゃんは、ぼくが生
まれる前に、働き口を求めて神戸に出て来て、そこの小
さな工場で働いて、機械の技術を身につけたんや。ぼく
は、そこで生まれた。ところがおとうちゃんが工場の機
械にはさまれて、手足に大けがをしてしもうたんや。そ
のため、今も体が自由に動けへん。おとうちゃんは、そ
れから会社をやめて別の仕事をさがしたけど、いい仕事
みつかれへん。家も転々とした。おかあちゃんが、事務
の仕事で働きに行ってるけど、夕方帰って来て、いつも
ガミガミおこるばかりや。学校の悪口言うては、『い
い高校へ行け。』ばかりや。家にいると、おれ、いつ
もいらいらしてくるんや。」

ミナコは最後のほうで語ったが、言わなければならない
ことの、三分の一も言えなかった。あとで、作文にこ
う書いている。ミナコの言いたかったことだ。

「私にとって、家族ってどんなものだったろうか。私の
父と母は、よくけんかした。何回も何回もけんかして、
近所の人が中にはいって、もとどおりにしてくれた。

けんかのたびに、父が母に出ていけとって、私にまで
あたった。私のものなんか、十円のものでも買うのをもっ
たいないと言った。それから父と母は別れて、私は母と
アパートを借りて住んだ。ものたりないけれど、楽しい
毎日だった。母は、父の悪口をよく言った。父は部落の
人間だけれど、母は部落の人間ではない。母は部落の悪
口も言った。ところが、ある日、母が私を残して突然い
なくなった。私は親戚の人たちの世話で、また父のもと
にもどった。いま、父といっしょに暮らしている。父は
廃品回収の仕事をしている。父は以前のように、私にボ
ンボンあたったりしなくなった。けれど、夜おそくなる
まで家に帰ってこない。」

ミナコは、友だちと学校を出た。棟をつらねた文化住
宅の前をすぎると、そこからミナコの住む部落になる。
家に帰っても、だれもいない。

ミナコは考えつづけていた。「むら」の外の子も、あ
んなに苦しい生活をしているんやな。同じ「むら」のサ
トシもサチコも、がんばっているんやな……。